

君津平川線滝ノ口向台古墳群第9号墳調査概要

小 高 春 雄

I はじめに

周知の如く、木更津市周辺は東京湾横断道路の建設に伴い、その受け皿となるべき道路網の整備が行なわれている。袖ヶ浦町～木更津、君津両市の山間部を抜ける県道君津平川線の道路改良事業もその一環であり、昭和63年8月より開発事業に先行して埋蔵文化財の調査を行なっている。事業の性格により、調査対象地は広大な遺跡の一角を占めるにすぎないが、縄文時代・弥生時代の集落、古墳時代初頭の古墳群を始めとして、多くの遺構が検出されている。とりわけ、古墳群は本県における出現期古墳（註1）の様相を考えるうえで、貴重な資料を提供したといえよう。平成元年3月をもって、古墳群およびその周囲の調査が終了したので、ここにその概要を紹介したい。

II 遺跡の位置

遺跡は君津郡袖ヶ浦町吉野田字寺原に所在する。袖ヶ浦町の南部は一部小櫃川のなす河谷平野をこえてその南側を含み、木更津市と境界をなしている。吉野田地区はその北西部に位置し、小櫃川の一支流である鎗水川の下流域を占め、細長い丘陵状台地と深い谷が適度に混在する。本古墳群は其中でも比較的広い台地と瘦尾根によって結ば

れた略円形の台地上である。北側半分は既に土取りによって削り取られ、残存部の更に東側半分が今回の調査区である。

III 立地と環境

本遺跡はその立地という点でいくつかの特徴を挙げることができる。

まず、小櫃川に近接した高台（標高約50m）に位置し、広い河谷平野はもちろんのこと、対岸の台地群も広く視界の内におさめることが可能であること、加えて、遺跡周囲は鎗水川のなす谷沿いに比較的まとまった平地（谷水田として利用）が形成されており、その入口部に突出した場所に立地することである。

第一の点は、小櫃川流域に限らず古墳立地上の一大共通項ともいえ、事実本地域でも前方後円墳を含む大きな古墳群のほとんどがそうである。これに対して、第二の点は小櫃川の河谷平野の開発時期とも深く関連する。弥生時代後期には未だ台地周囲のいわゆる谷田経営が主流であったのに対し、古墳時代になると広く開発の先鞭がつけられ、同後期には面的な広がりを形成するに至ったようである。初期の古墳立地を考える場合、むしろ前代の遺跡分布やそのあり方（遺構の粗密、出土遺



第1図 遺跡の位置と古墳分布（国土地理院 1：50,000 木更津・姉崎縮小）

- 1 滝ノ口向台遺跡
- 2 山王辺田遺跡(II号墳)
- 3 坂戸神社古墳
- 4 手古塚古墳
- 5 鳥越古墳

物等)が問われているといえよう。その意味で、本遺跡(弥生時代中期～同後期末)を含めた鎗水川下流域の弥生時代の遺跡の稠密さは示唆するところがある。

小櫃川流域における出現期古墳は本例が始めてであり、直接の比較例はないが、その前後に位置する方形周溝墓、古墳の発見例は結構多い。ここではその概要を紹介することはさけるが、木更津市田川遺跡群第1号、第2号方形周溝墓、袖ヶ浦町山王辺田遺跡(II号墳他古墳・方形周溝墓群)が時期的、地理的に近接する例として挙げよう(註2)。小櫃川中下流域では、近年開発が進み、請西遺跡群、大竹遺跡群のように広域にわたる調査が目立っている。本古墳群の出現を理解するにはさらにその成果に注目してゆく必要がある。

IV 9号墳の概要

まず最初に9号墳を含めた古墳群の概要について記しておくたい。

本古墳群は調査区域で方墳4(内2基は盛土が遺存せず方形周溝墓とも受けとれるがここでは方墳として扱う)、円墳1が検出されているが、隣接する西側山林中に前方後円(方)墳1、円(方)墳が確認されており、この両者の合計が現時点での古墳群の基数である。しかし、図をみてもわかる通り、遺跡の北側半分は既に消滅しており、その実態はいずれにしても未知数である。但し、地元住民の話によると、消滅した範囲はかつて畑として利用されていたが、古墳のような高まりはみられなかったとのことであり、大型の古墳は少なくとも存在しなかったのではないかと考えられる。

時期的には、9号墳、10号墳、005がいずれも調査の結果、古墳時代初頭に属することが明らかとなったが、004、029については、いずれも遺物が少なく(土器の細片)、時期決定の決めてを欠いている。しかし、種々の状況から、004は周辺古墳群と同じ時期に(註3)、また、029はそれより新しい古墳時代の中・後期に属するかと予想される(註4)。また、発掘調査の手を経たわけではないが、8号墳、7号墳も古墳時代初頭、一連の方墳群とほぼ同時期かと推測される。つまり、本古墳群は一部時期的に下る古墳も見られるものの、そのほとんどは古墳時代の初頭に属し、しかも、8号墳を中心として、大小の方墳群がその周囲をと

りまく群構成をなしていたと思われる。

9号墳はこの8号墳の東側にあり、それぞれ陸橋部、前方部が向き合って隣接する。以下、9号墳の具体的な報告に移りたい。

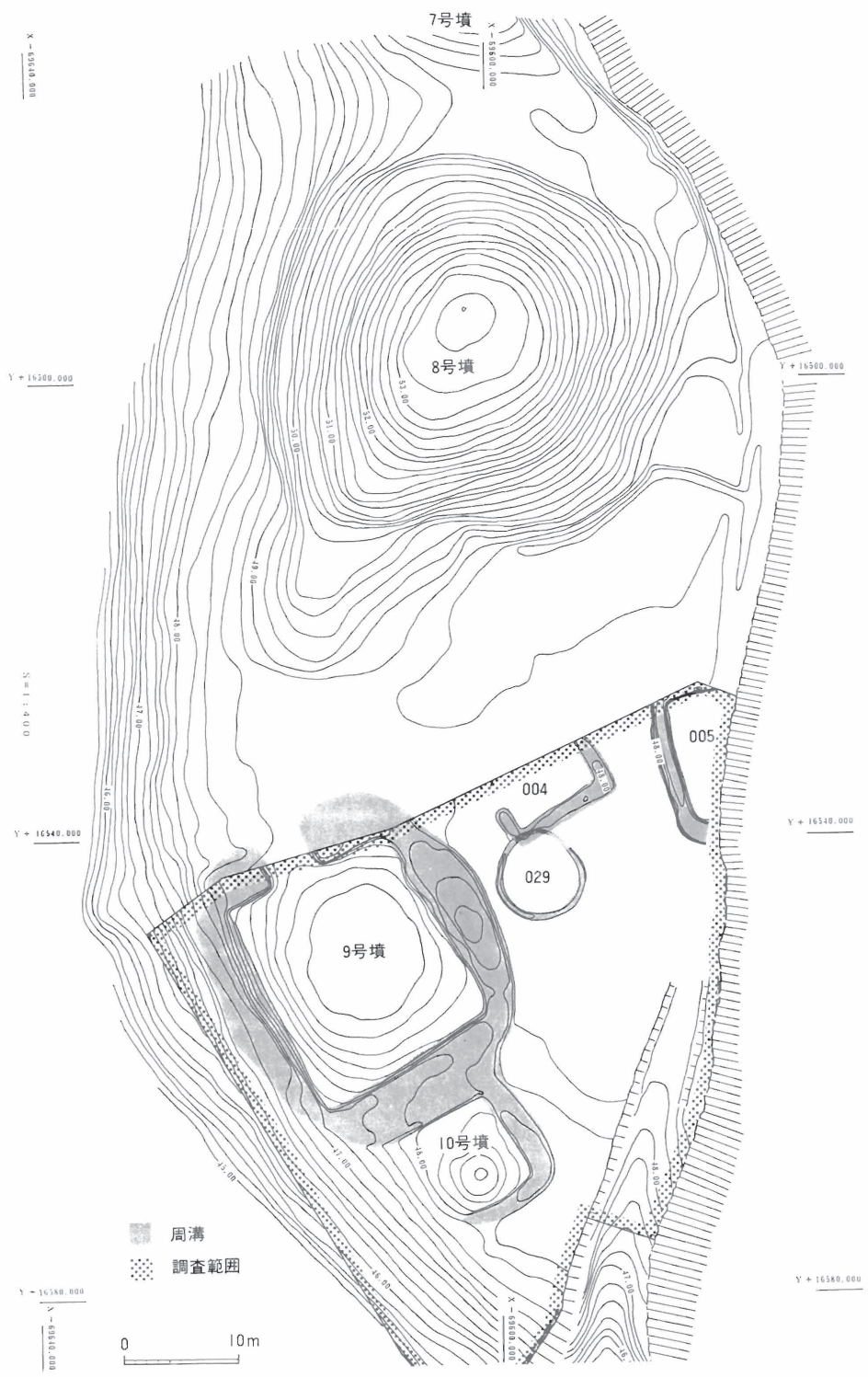
9号墳は長軸を北東に向け、墳丘は平面は長方形、周溝部分を含めた外形は楕円形である。規模は、墳丘部で16×18.5m、周溝部分を含めると、(25.5)×(36.5)mとなるが、斜面部や未調査区があり、括弧付きの値とならざるを得ない。墳丘の高さは見かけ上で約50cmを計るが、現状では最も遺存のよい場所で30cmに満たず、その大部分が既に失われたものと思われる。周溝の断面形状は逆台形であるが、各辺中央では多少逆カマボコ型を呈する。

盛土はロームブロックに多少の腐植を交えたもので、旧表土の黒色土とは峻別出来る。古墳そのものが多少の傾斜面上に作られたためか、低い傾斜部分を埋め戻しており、築造時、不定形の溝と半ば埋没過程にあった住居跡も同様である。セクションを見ても予想できると思うが、その後の畑地化・耕作によって、墳丘をかなり削って斜面を埋め立てている。その時期は上から2番目の層中に宝永火山灰を含むことから、当然それ以降に求められよう。墳丘中の埋葬施設もその時点で破壊された可能性が高い。

周溝の覆土は最下層がロームブロックを含み、明るい色調をなす他は、いずれも黒色の腐植土である。夾在する遺物のあり方から各土層の堆積時期を追うことが可能であり、その結果から、(1) 築造後程ない内にその中央部で10～20cmの腐植の堆積をみたが、その後は緩慢な堆積過程をたどり、(2) 平安時代頃には漸くわずかな窪みを残す程になったことが明らかになっている。周溝は平面的に僅かずつ下げながら調査を進めていったがその過程で周溝内の埋葬施設と思われるものは検出していない。一方、刀子、土玉を出土した溝内土壌は周溝を掘りこんでおり明瞭に識別できた。

10号墳との関係であるが、両者は見かけ上周溝を共有した形となっている。セクションを検討した限りでも、両者に切り合い関係は認められなかった。しかし、種々の状況からみて、隣接する9号墳より若干遅れた段階で10号墳が築かたとみるのが妥当であろう。

陸橋をなす入口部については、その約半分が調



第2図 滝ノ口向古墳群地形図 (1:600)

査範囲を外れるために、その形状、規模等を知ろうとて制約されたものとなった。しかし、この部分は出現期古墳をみるうえで極めて重要な意味を有している。それゆえ、関係者の理解を得たうえで最低限必要と思われる周溝確認調査を行なうことにした。現地は杉の密植地でもあり、限られた調査方法を採用他はなく、その成果も当然限られたものではあったが、その形状はほぼ推測可能である。結論からいうと第3図のようになるであろう。ここでわかった重要な点は、周溝が入口部を画さず、周溝幅も広がらない、つまり、前方後方形にならないということである。

埋葬施設については、当初、主軸に直交してその中央部に二ヶ所の落ち込みを認めたが、調査の進捗に伴い、共に前代（弥生時代後期）の遺構であることが明らかとなった。崩され、消滅したと考えるべきであろう。ただひとつ、明瞭な溝内土壌が墳丘裾に隣接して検出されており、これは土壌墓かと思われる。

次に出土遺物について述べたい。遺物は周溝内、及び、墳丘中より多量に出土しているが、そのほとんどは土器片である。しかし、その土器片の大部分は弥生土器であった。これは、9号墳と重複する弥生時代の稠密な遺構から混入した結果であろう。

古墳時代の遺物はその出土位置から大きく4ヶ所に、また、その出土層位から周溝内では2グループに、墳丘部では1ないし2グループに分けられる。まず出土位置であるが、(1) 周溝内に単独あるいは数点、(2) 周溝内に複数、(3) 溝内土壌、(4) 墳丘部、に分けられ、第3図で示した遺物でみると、その内訳は、(1) がNo.1～4、(2) が5～12、(3) が13、14、(4) が15である。次に、出土層位では、まず周溝内で、(1) 周溝底、(2) 周溝覆土内に分けられ、同様その内訳は、(1) が1～4、(2) が4～12である。一方、墳丘部では旧表土上に限定されたが、これは、墳丘が大部分失なわれた結果と思われる。溝内土壌の2点は共に壙底である。即ち、これらを総合すると、1～4、13～15については築造時、あるいは、築造後程ない時期に、その他については時間的に下る（といってもそれほど大きな差は考慮しなくてよいが）遺物とみるべきであろう。

以上は現状（比較的大破片を復元・接合した結

果）をそのまま述べたにすぎず、遺物の相対的な出土状況についてはなお若干の異同のあることを了承願いたい。

次に、個々の遺物について簡単な説明を行ないたい。第4図1～6は高坏であるが、この内、1、2、4、6は大型、3、5は小型の高坏になる。前者は個体間にその整形技法の点で違い（ヘラナデとナデ）もみられるが、共に口縁端部と脚部裾が内湾する点に特徴がある。透孔は共に3カ所である。後者は内外面丁寧なナデ整形で、焼き締まっている。また、坏部は内湾し、脚部は裾広がり呈する。透孔は2対3ヶ所である。7は底径の小さな椀である。焼き締まっており、ヘラナデ、ナデ整形である。8は小型の甕であり、焼成、整形は7と同様。9はいわゆるパレススタイル壺である。外面からみた場合、幅広の複合口縁を呈するが、断面図でもわかる通り下端を貼り付けによったもので、器形は下脹れ形である。頸部は薄く底部は小さく上げ底で、安定形に欠ける。口縁部は平行線文（内面は斜方向の列点文によって区画する）を施し、体部はヘラナデ及びハケ目整形である。10は広口壺である。頸部は結節文で界する斜縄文を施す。11はいわゆる特殊器台である。上下に縁帯が廻り、胎土、整形等全体に粗雑な作りといえよう。12は小型の甕である。底径は小さく、上げ底であり、いわゆる「受口状口縁」を呈する。口縁部外面に斜線状の列点文、胴部外面にはハケ目整形の後、上位に横走羽状文（クシ状工具ではない）を施す。胎土に石英を含み、器壁薄く、焼き締まっている（註5）。

13～15は金属製品である。13は先端及び茎の末端を欠く銅鏃である。軟質で歪みや断面の不整合が認められる。14は小型の板状鉄斧である。15は先端を欠く刀子である。

16は土玉である。縦に割られている。

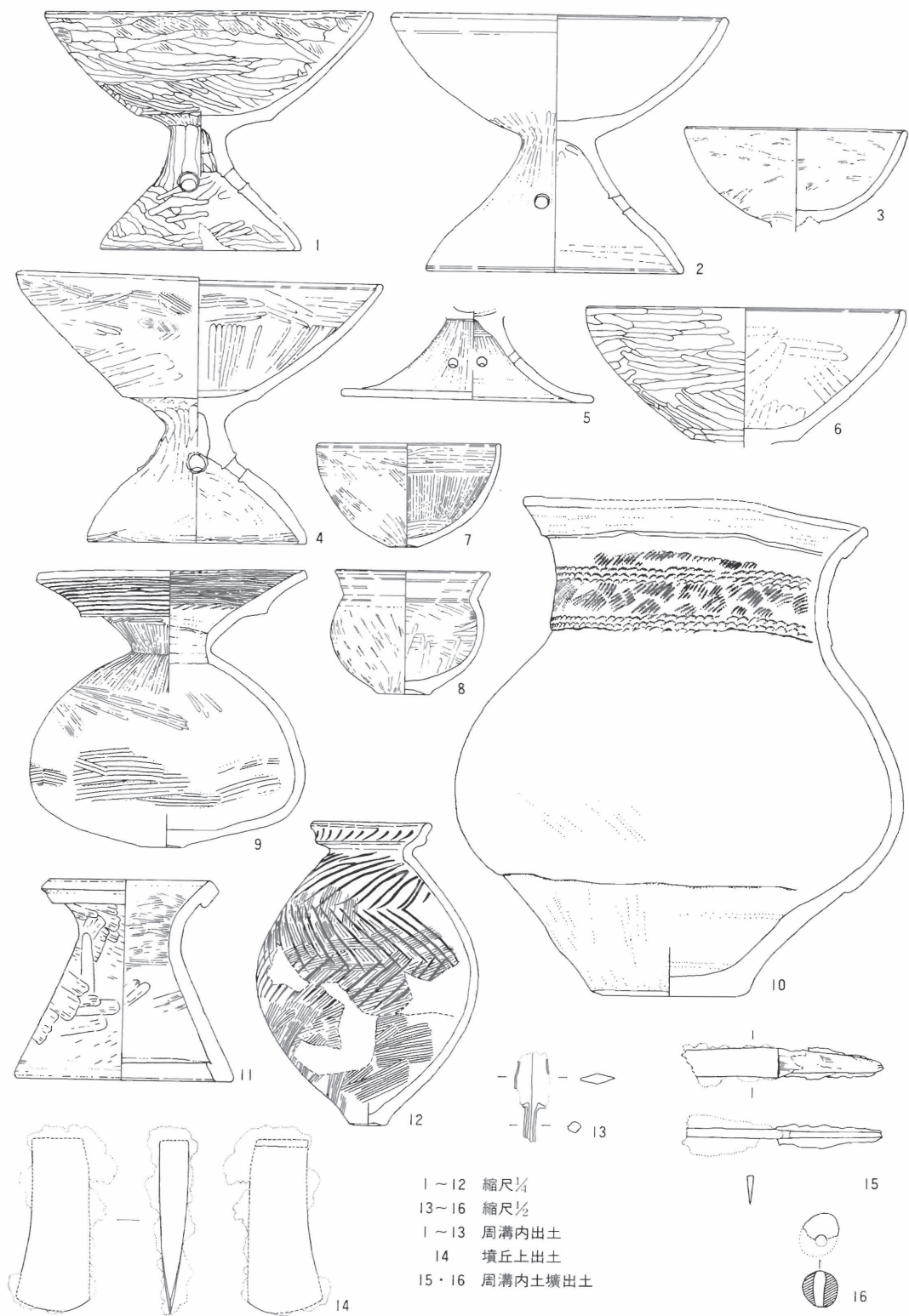
V まとめ

以上、9号墳の概要について述べた。ここでは9号墳を含めた本古墳群の年代観、及び、その有する意義について言及し、今後の研究の礎とした。

9号墳の年代観については未だ問題のあるところと思われるが、その相対的な位置付けについては可能である。即ち、出土土器を概観した場合、



第3図 9号墳地形図(1:200)及び遺物出土状況



1~12 縮尺 $\frac{1}{4}$
 13~16 縮尺 $\frac{1}{2}$
 1~13 周溝内出土
 14 墳丘上出土
 15·16 周溝内土壙出土

第4图 9号墳出土遺物(1/2, 1/4)

その多くは非在地系、より限定すると、東海西部の土器に近似しており、元屋敷期古段階に位置付けられると思われる。本県でいえば、土器編年に混乱がみられる現在、実例で比較すると、市原市神門4号墳～3号墳までの範囲内にほぼ収まるものとしてよいだろう。在地系の土器(第4図№10の広口壺他、他に図示していないが、伝統的な複合口縁装飾壺もみられる)をみても、県内の共伴例からして妥当なところではなかろうか。それは、本県北部において未だ北関東系弥生土器の残存する時期である。

次に、その遺構からみた場合、本古墳が中央に入口部を有する形態に属しており(田中新史氏の分類ではBI型)、このような形態がいわゆる出現期にみられる過渡的な墳形であることも近年の調査結果から明らかである。本県では市原市国分寺台遺跡群、同大厩遺跡、袖ヶ浦町山王辺田遺跡等で類例が報告されているが、いずれも本例と前後する時期とみてよい。

さて、既に9号墳及びその周囲に展開する方墳群が一連のもので、8号墳をとりまくように存在する可能性を指摘した。9号墳の年代からすれば、8号墳も同じかあるいは遡る年代さえあてられよう。実際、9号墳の周溝確認調査—それは8号墳の前方形前面に一部及んだが—においても周溝は確認されなかった。前方形前面に周溝が及ばないことはほぼ確実であり、また、低く狭い前方形のあり方からしても蓋然性が高いといえよう。8号墳を前方後方墳とみるか前方後円墳とみるかはなお微妙であるが、墳丘長で約50mを計り、同じく出現期古墳である神門古墳群中のどの古墳よりも大きく、また、遺存も良い。そして、重要な点は、飯合作や山王辺田遺跡にみられるような群構成をとることである。神門古墳群の場合、周囲の状況が必ずしもはっきりしないが(註6)、その後成立した古墳群では飯合作や草刈古墳群に代表されるような群構成がしばしば認められる。そのはしりともいえる本古墳群はその意味でも貴重な例といえよう。

このように、9号墳は単にその年代が出現期というのみならず、その形態や周囲の古墳群との関係という点でも、本県における該期のあり方を知るうえで特筆してよいだろう。但し、隣接する8号墳、7号墳の内容如何でその資料的価値は更に

高くなるはずである。今回の報告はその意味で本古墳群研究の一つのステップにすぎない。

註

- 1) 「出現期」という名称については、田中新史氏の提唱にしたがった(田中 1984)。
- 2) 報告書未刊であり、その詳細は知りえないが袖ヶ浦町教育委員会の御好意により、遺構実測図及び出土遺物を見せていただいた。
- 3) 西側約半分が調査区域外にあるが、重複する弥生時代の住居跡を切っていることや、その形態(中央に入口部を有する)から当該期とみられる。
- 4) 重複する遺構(004、及び、弥生時代の住居跡)を総て切っており、また、隣接する今年度(平成元年)の調査区域(南側斜面)において古墳時代中期の遺物若干と後期に属する土墳墓が数基出土・検出している。
- 5) 非常に特徴的な土器であり、いわゆる近江系の甕に近似する。
- 6) 神門古墳群の周囲は部分的な調査が行なわれており、その限りでは周囲に方墳群が廻る可能性は少ないようである。

引用参考文献

- 愛知考古学談話会編 『欠山式土器とその前後研究・報告編』 東海埋蔵文化財研究会 1987
三森俊彦 阪田正一 『市原市大厩遺跡』 (財)千葉県都市公社 1974
白井久美子「《研究ノート》 市原市草刈遺跡の方墳群」 『研究連絡誌』 第22号 1988
袖ヶ浦町史編纂委員会編 『袖ヶ浦町史 通史編上巻』 袖ヶ浦町 1985
田中新史 「出現期古墳の理解と展望—東国神門五号墳の調査と関連して—」 『古代』 第77号 1984
千田利明他 『田川遺跡群』 田川遺跡群発掘調査会 1980
沼沢豊 森尚登 『佐倉市飯合作遺跡』 (財)千葉県文化財センター 1978